坂本勉著

『イスタンブル交易圏とイラン：
世界経済における近代中東の交易ネットワーク』

慶応義塾大学出版会，2015年4月，388+v 頁，定価6300円（税別）

小 松 香 織^{*}
KOMATSU Kaori

本書は，1990年代以降著者が一貫して追求してきた中東交易圏をテーマとする研究成果を，これまで発表した著書，学術論文を大幅に加筆・修正し，あらたに序章と終章を書き加えて一書としてまとめたもので，長年の研究の集大成といえよう。オスマン帝国，イラン，ヨーロッパにまたがる広大な地域を射程に収めるスケールの大きさもさることながら，世界システム論に対する実証的批判の書としても注目すべき論考である。研究の幅広さでは遠く及ばないものの，オスマン帝国の近代史の領域で著者と問題関心を共有し，その研究から学ぶところ大であった者にとってはまさに待望の書である。評者としてははなはだ力不足といわざるを得ないが，まずその内容を紹介したうえで，若干の所感を述べてみたい。本書の構成は次の通りである。

- 序 章 イスタンブル交易圏のなかのイラン
- 第1章 イスタンブルの中継貿易とイラン
- 第2章 イランのアルメニア系商人の交易ネットワークとイスタンブル
- 第3章 イランの絹貿易とオスマン帝国のギリシア系非ムスリム商人
- 第4章 イランにおけるカーペット・ブームとイスタンブルの中継貿易
- 第5章 イランのタバコ・ボイコット運動とイスタンブル
- 終 章 変容するイスタンブル交易圏

序章ではまず，本書に通底する分析概念としての「交易圏」と「交易ネットワーク」が提起される。中東地域においてはその苛酷な自然環境から分業が発達し，そこから交換の場としての市が生まれたとする著者は，その結果，広狭の交易圏が形成され，それを結ぶ交易システム，ネットワークが存在したとする。その歴史の変遷をたどり，近代以降のイスタンブルを中心にイランにつながる交易ネットワークに焦点が絞られていく。著者は本書の主眼を近代世界システム論への批判の意味も含めて，ヨーロッパ資本主義経済の進出に中東の商人が強固で自立的な交易ネットワークで対抗し，独自の広域的な交易圏に昇華させていく過程を，地域間交易，比較関係史の視点からみていくことにあるとする。

第1章では，中東イスラーム世界の資本主義的世界経済システムへの包摂について，従来のヨーロッパの一方的な経済的進出という視点からではなく，そのプロセスにおいて独自の交易圏を維持していた部分があったことが論証される。事例として選ばれたのはイスタンブルを結節点とする綿製品の交易ネッ

^{*} 早稲田大学教育・総合科学学術院教授
Professor, Faculty of Education and Integrated Arts and Sciences, Waseda University

トワークである。著者は「イスタンブル交易圏」という概念を設定する。それはイラン商人がオスマン帝国のギリシア系、アルメニア系非ムスリム商人との交易ネットワークによって作り出した広域的・重層的な交易圏であった。ヨーロッパ商人の多くは、本国からイスタンブルに運んできた綿製品のその先の流通を、土地の商業事情に精通する現地商人に頼らざるをえなかったとし、その実態がイギリス外交文書、オスマン語史料、ペルシア語史料を用いて、オスマン帝国のギリシア系非ムスリム商人であるラッリ商会やイラン商人のアミーノッザルブ商会の活動を通じて具体的に語られる。彼らはイギリスの綿製品をイスタンブルを中継地としてイランに輸出するのだが、その結果イスタンブルからイランまでヨーロッパ商人を寄せ付けない強力な交易ネットワークが形成されていくのである。本章では、オスマン帝国がヨーロッパ諸国との間で中継関税、輸出税の引き下げなどを取り決めた1860年から62年までの通商条約改定交渉の経緯についても詳しく述べられている。これら一連の改定は従来ヨーロッパ資本主義側のイニシアチブによるものとして論じられてきたが、自らに有利なトラブゾン=タブリーズ・ルートを守り、ザカフカス・ルートに対抗しようとするオスマン政府の意志の反映でもあったことが指摘されている。ここにも周辺化された側の主体性を見て取ることができよう。

第2章では、イスタンブルを本拠地として交易活動を行い、マンチェスターに支店を出していたイラン出身のアルメニア系商人アルセニアン家の相続争いに関する裁判史料を詳細に紹介し、その内容からイランのアルメニア系商人がその強固な人的つながりを背景に、イギリス、オスマン帝国、イランを結ぶ広域的な交易ネットワークを形成していたことを読み解いている。裁判の記録の中には、たとえばアルメニア系商人のヨーロッパの都市（この場合はマンチェスター）での活動の様子や人脈などを知ることができるいくつかの興味深い文書があるものの、全体として本章はひとつの史料の紹介のみで構成されており、やや物足りなさを感じる。他章に組み込んでもよかったのではないだろうか。

第3章では、イランの繭貿易とそれに関わったオスマン帝国のギリシア系非ムスリム商人について論じられる。繭貿易はイランの輸出貿易のなかで生糸ほど大きな比重を占めることはなかったが、著者はイラン経済が世界経済に取りこまれる過程でどのように再編成されていったのかを理解する上で重要な指標を与えるものとして注目に値するとする。イランの繭貿易は1891年オスマン帝国産の蚕種が導入されたことで拡大するが、生産者と買付商人、輸出商人との関係、流通のしくみなどをオスマン帝国のギリシア系非ムスリム商人パスカリディ商会代表のベザノスという人物の活動を通して明らかにしている。イランの対ヨーロッパ向け繭貿易はフランス、イタリア系の商社が60%以上のシェアを占めていたが、そのなかでオスマン帝国のギリシア系非ムスリム商人は、現地商人から繭を買い付け、代理人として輸出商人に繭を売り渡す行為によってヨーロッパ商人に対抗したという。しかし、著者は彼らの背後にヨーロッパの債権国が運営するオスマン債務管理局の影を看取し、その意向に留意する必要があることも指摘している。

第4章では、ペルシア絨毯をイランの代表的な貿易品として取り上げ、生産と流通におけるヨーロッパ人商人とイランの商人との競合、世界経済との関連性が「イスタンブル交易圏」の枠組みの中で論じられる。19世紀末、イランの輸出の主力だった生糸貿易が衰退した時、代わって浮上したのが絨毯だった。絨毯貿易は1898年から1908年までイランの輸出の第1位を占めた。イギリスをはじめとするヨーロッパの商人は競って現地生産を行い自前の流通ルート、交易ネットワークで輸出した。しかしイラン商人にはそうしたルートが無く、イスタンブルが中継貿易の境域市場として重要な役割を果たした。絨毯はイラン商人にとって、オスマン帝国の非ムスリム商人を介さずに独自のネットワークで取引できる数少

ない商品だった。しかしあくまでもイランからイスタンブルまでの交易圏に限られ、世界市場全体からみるとトルコ絨毯が圧倒的なシェアを誇り、その生産はヨーロッパ系の商会在共同出資するトラスト会社に支配されていたという。本章は著者の『ペルシア絨毯の道⁽¹⁾』を合わせて読むことでより理解が深まることだろう。

第5章では、タバコ・ボイコット運動が論じられる。この運動は近代イランの民族運動の先駆けとして数多くの研究がなされてきたが、そのほとんどがイラン一国史の範囲での、しかも政治史的観点からなされたものであったと著者はいう。そこで、本章では経済的な観点から、イランからオスマン帝国にまたがる広域的な交易圏という枠組みのなかにタバコの流通を位置づけ、この運動の経済的意味を考察している。前半部ではタバコ・ボイコット運動の顛末については政治史との重複を避け、利権廃棄後の補償交渉や輸出問題といった後始末に多く紙幅がさかれている。後半部では舞台をオスマン帝国に移し、そこでのイラン産タバコの独占的販売権を獲得した「トンベキ専売会社」をめぐる、その存在に反発したイスタンブルのイラン商人の抵抗や、生産地イスファハンの商人たちのトンベキ社による直接買い付け阻止の動きを通じて、イラン商人が自らの交易ネットワークを守ろうとするものの、結果的に新たな独占体制に巻き込まれていった様子が述べられる。すなわち「イスタンブル交易圏」の視点からタバコ・ボイコット運動を再考すると、イラン民族運動の勝利という肯定的な評価以外に、ヨーロッパ資本主義が主導する世界経済へ取りこまれていったイラン商人の限界が見えてくるというのである。

終章では、オスマン帝国の消滅からトルコ共和国の建国という歴史の流れの中での「イスタンブル交易圏」の変容が、現代トルコ最大の財閥を築いたコチュとサバンジという2人の人生を通して語られる。両大戦間期に非ムスリム商人の退場とトルコ系商人の成長が見られた。この時期前述の2人が共に非ムスリム商人の協力を仰いで事業を拡大している点は興味深い。第二次大戦後には、エタティズム（国家資本主義）から民間資本へ重点を移す経済政策の転換により、トルコ系の商人・企業家の手によって生産と流通を結合させた「イスタンブル交易圏」が形成されていく。著者はこの新しい交易圏の中にオスマン帝国以来の交易ネットワークの継承を見、グローバル化する世界経済のなかに必ずしも呑み込まれないその独自の広域的な経済圏のありかたを探っていくことが肝要であると結んでいる。

著者は本書の目的を、イスタンブルを中心とし、イランにまでおよぶ交易ネットワークとそれが生み出した交易圏、すなわち「イスタンブル交易圏」について、絹、タバコなどの具体的な商品を取り上げて検討し、その実態を解明することにあると述べている。そして、その先に見すえられているのは、ウォーラステインの資本主義的世界経済システム論への批判、反論である。世界システム論に対しては、統合された側の視点の欠如、つまりヨーロッパ中心史観であるとの批判があり、そのアンチテーゼとして、たとえばインド史ではムガル帝国とイギリス東インド会社との関係を再検討するような18世紀の再評価の動きもあった。⁽²⁾ 本書のように中東を専門とする研究者からの反論も多い。オスマン帝国の世界経済システムへの統合、周辺化をめぐる議論は1970年代後半から盛んに行われた。ウォーラステイン自身はといえば、1979年に専門外の立場からとことわりながらもオスマン帝国の統合の時期について果敢に問題提起をし、⁽³⁾ 1981年にはトルコ人研究者レシャト・カサバとの共著論文も発表している。⁽⁴⁾ その後オスマ

(1) 坂本勉『ペルシア絨毯の道』山川出版社、2003。

(2) 脇村孝平「アジアからみた世界システム論：インド洋世界をめぐる」川北稔（編）『知の教科書ウォーラステイン』講談社選書メチエ222、講談社、2001、159-179参照。

(3) I. Wallerstein, "The Ottoman Empire and the Capitalist World-Economy: Some Questions for Research," *Review* (Fernand Braudel Center for the Study of Economics, Historical Systems, and Civilization) 2/3 (1979), 389-398.

ン史研究者から様々な異論・反論を受けたことは周知のとおりである。⁽⁵⁾

著者が繰り返し本書で述べている世界システムに組み込まれた側の主体性の問題もこの一連の流れの中に位置づけることができよう。本書の前半部分はすでに著者が1999年に発表した「中東イスラーム世界の国際商人」⁽⁶⁾の中でおおよそその枠組みが論じられているが、本書でより詳細に語られたオスマン帝国の非ムスリム商人とイラン商人の活動は、周辺化、重層化が進んだとされる時代に、なお強固で独自の交易ネットワークを保持し、中核地域の進出に対抗した「在地の」勢力があったことを示しており、世界システムに組み込まれた側の視点に立って、その自立的側面を明らかにしたことが評価される。

本書では、ヨーロッパ商人に対抗するオスマン帝国のギリシア系非ムスリム商人の代表的な事例としてラッリ商会が登場するが、前述のカサバもすでに1988年に出版した『オスマン帝国と世界経済：19世紀』⁽⁷⁾の中で、オスマン帝国の世界経済システムへの統合のプロセスにおいて重要な役割を果たした「非ムスリム仲介者 (intermediaries)」の存在を指摘している。カサバのいう「仲介者」とは商人、金融業者、徴税請負人のことだが、彼らは1840年代から70年代にオスマン帝国と英国との通商関係が飛躍的な発展をとげた際、交易活動に積極的に投資し、拡大する輸出のネットワークに生産者を結びつけたという。カサバは19世紀の外国、特に英国資本のアナトリア内陸部への進出を阻んだ非ムスリム仲介者集団の力量を認め、これまでトルコのナショナリズム史観からは外国資本の買弁とみなされ批判されてきた彼らを、資本家として肯定的に評価している。そしてその中に前述のラッリの名をあげているのである。すなわち本書で描かれたオスマン帝国の非ムスリム商人の活動は、カサバの考察をさらに発展させるものといえよう。ただし、著者は世界システムに組み込まれた側の主体性のみを主張しているわけではない。5章では、現地イラン商人の挫折が語られ、ヨーロッパの進出に対抗するイメージとは逆に、世界経済システムに吞み込まれる様が強調されているかのようでもある。今後この問題はさらなる検討が必要であることは確かである。

評者が注目する本書の特色は、交易圏や交易ネットワークをそれにかかわった商人たちのバイオグラフィやファミリー・ヒストリーを通じて描いている点にある。経済史の研究はとかく統計値の分析など数値化されて論証されることが多く、無機質なものになりがちである。しかし、本書はたとえば綿貿易について、貿易統計などからその動態を数量的に把握すると共に、イラン人商人アミーノッザルブという一人の人間を通して語っているので、そこには読者をひきこむ物語性がある。また史料についても、トルコ、イラン、どちらにも偏らず、双方の膨大な量の一次史料を渉猟し、それに加えて領事報告などヨーロッパ側史料も駆使しながら詳細な分析を行っている。ここに一国史に偏らない著者の研究姿勢がうかがえる。

最後に、本書は1983年からおよそ30年間をかけて発表された著書、論文をまとめたものであるため、それに由来すると思われるいくつかの気になった点を指摘しておきたい。まず、章の長さにはばらつきがあること。そして、各章をつなぎ合わせるにあたっては著者の配慮がうかがえるが、それでも記述が重

(4) I. Wallerstein, and R. Kasaba, "Incorporation into the World-Economy: Change in the Structure of the Ottoman Empire 1750-1839," *Middle East Technical University Studies in Development* 8/1-2 (1981), 537-570.

(5) 例えば、イナルジクやファローキーは、オスマン帝国史側の視点から、オスマン帝国の主体性を指摘して統合のプロセスを相対化した (H. Inalcik, *Doğu Batı, Makaleler I*, Ankara, 2009²; S. Faroqi, *The Ottoman Empire and the World around It*, London and New York, 2004).

(6) 坂本勉「中東イスラーム世界の国際商人」松井透 (編)『商人と市場：ネットワークのなかの国家』岩波講座世界歴史15, 岩波書店, 1999, 209-234.

(7) R. Kasaba, *The Ottoman Empire and the World Economy: The Nineteenth Century*, New York, 1988.

複したり前後したりする箇所があることである。たとえば、カータルトの研究がしばしば引用されるが、読者は初出箇所ではなく 5 章で初めて彼がアメリカのトルコ経済史家であると知ることになる。その他、「マズバタ」、「テズケレ」などオスマン語史料の名称をそのまま使っているが、一般の読者にはわかりづらいのではないか。日本語訳も必要かと思われる。

これらはすべて枝葉末節なことであり、本書の真価とはまったく関係はない。評者は本書を著者の長年の研究の集大成といったが、誤解を恐れずにいうと、まだまだこの先の展開が楽しみな研究である。ライフワークとして続編の刊行を期待したい。